

書物で感じる山の魅力

「日本山書の会」会員

百瀬 武さん(73、松本市中央4)



自宅の書斎で山書を手にする百瀬さん。古本屋さんとのやり取りのおかげで、好きな本が増えました。

山の書と書く「山書(さんしょ)」。山に関する書物全般を指す言葉だという。愛好家による全国組織「日本山書の会」もあり、22、23日には松本市安曇の上高地で本年度の総会を開く。山の本の魅力に引かれ、収集を続ける同会会員で総会幹事の百瀬武さん(73、松本市中央4)は「多くの人が山書を目を向けてほしい」と思いを新たにしている。

(阿部貴徳)

「実は、登山はほとんどしない」という百瀬さん。山の本にのめり込んだのはここ10年ほどだ。大の読書好きで、定年退職して市内の古書店に通う中で、店主に3冊の本を薦められた。

北杜夫さん(1927~2011年)の「白きたおやかな峰」、登山家、松方三郎さん(1899~1973年)の「アルプス記」、登山家、実業家の小谷隆一さん

(1924~2006)と「装丁の美しさにも引かれました」。

「そんなに山の本が好きなら、山書の会に入れば」と古書店主に勧められ、2010年4月に入会。その1ヵ月後に上田市で開いた

総会にも足を運んだ。

同会は「山岳関係文献を多角的に研究する」ことを

目的に1962(昭和37)年発足。全国に約130人の会員が

いる。山書の収集家で知られる小谷さんもかつて加わ

り、信州大には「小谷コレクション」がある。百瀬さんは会員として毎年のように総会に出席しつつ、古書店などを回り、収集を続ける。一昨年には約2000冊を市に貸し出した。

そんな百瀬さんが気に掛けるのは蔵書の行く末だ。「所有者が高齢化する中、膨大な蔵書を残されても家族では抱えきれない」。蔵書を寄付する会員も多いが、岳都・松本がその受け皿となり、山書を集める拠点になれるものかとの思いを強くする。

「山に登らない私が本を通じてさまざまな登山関係者と出会い、交流している。とてもありがたいこと。総会では会員と再会し、持ち寄った本を交換するのが楽しみという。(随時掲載します)

ひと
カブI

山書にのめり込むきっかけとなった3冊。アルプス記(手前は箱に収められ、背表紙側の留め具を外して本を出す